

常なる磐

つねなる いわ seasonⅢ

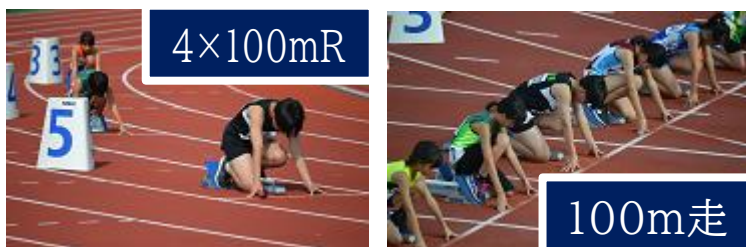
令和 4年 10月 7日(金)

その3 通算 265号

◇ 本番は、練習のように vol.Ⅱ

【VolⅡ：入賞を果たした3名にまつわる話】

◆ 100m 走：AMI さん



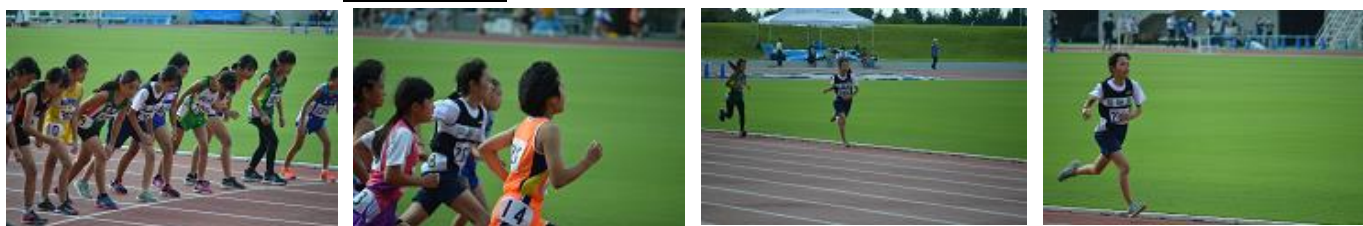
AMI さんが担った種目は個人種目の 100m 走と 4×100m リレー。つまりダブルエントリーだ。

体力的、精神的な重圧や疲れ等を考慮し、一人一種目の担当を基本方針とする中で、副主将の AMI さん

が2種目を担った。この形は主将の HRU 君も同じ。しかも、大きなプレッシャーのかかる第1走者だ。おそらく、監督の樹神先生が、役割を全うできるのは「2人しかいない」と判断した末のダブルエントリーだ。さらに言うなら、陸上大会が新しい形に変わって本校初のリレー出場。大会でのレース経験は誰一人いない。

こうした状況下で2人は役割を全うする。しかも、競技間が短い^{ほうふつ}中で出場した個人種目の 100m 走で入賞した意味は大きい。姉を彷彿させる見事な走りだった。

◆ 女子 1000m 走：MAI さん



過酷な 1000m 走を担ったのは MAI さん。最も苦しいと表現してもよいこの種目を、自ら進んで選んだというだけでも大きな価値がある。自分ならとてもできないが、2年前に同種目に出場した卒業生の姉と全く同じ。さすが姉妹だ。

さて、レース。スタート直後から3人で形成する先頭集団で「つばぜり合い」を演じた。ほとんど差がない状態で 400m (1週目) を通過するが、とんでもなく速いペース。それでも優勝した選手は、ペースを落とすどころか速度を上げる。

じわじわと先頭との差が開く。開いていた後方も差を詰めてきた。でもここから粘る粘る。詰めてきた相手を抜かせない。気力が走りを支えた粘りの走りだ。

3位入賞後に驚きの話を聞いた。エントリーした 14名の選手の内、MAI さんの持ちタイムは8番。つまり気力で順位を5つ上げたという訳だ。すごい一言。

◆男子 1000m 走：KOU 君



一番左の写真を見てもらいたい。黄色のユニフォームの選手が一番内側。そして KOU 君は、その隣だ。スタート位置は、内側から順に持ちタイム順で並ぶ。よって KOU 君の持ちタイムは、エントリー 15 名中 2 番目であることがわかる。

さて、レースだ。号砲とともにスタートして先頭集団が形成される。またしても女子と同じ展開で 3 名。3 番手につけていた KOU 君は、この間に相手の力量をつかみ、思い切って先頭に立つ作戦を選ぶ。400m を越えたあたりで先頭に立つと、これに負けじと 2 人がスピードを上げて仕掛けてくる。でも、KOU 君は抜かせない。抜かせない。抜かせない。絶対に抜かせない。必死の形相である。

600m あたりで一人脱落。黄色いユニフォームの選手との一騎打ちだ。でも抜かせない。抜かせない。2 人のスピードはさらに上がり、後方との差は開く一方。



そして残り 200m。一瞬のことだ。黄色のユニフォームの選手が、もう一段階ギアを上げた。まるで 100m 走を思わせるかのようなスピードでラストスパート。

とうとう抜き去られた。しかし、左の写真を見てほしい。

KOU 君のストライドは伸びている。体軸たいじくもしっかりし、顎も上がっていない。バテていたわけではないが、余裕がなかった。

そういえば、中間点あたりでオレンジ色のユニフォームの選手と先頭を争う「つば競り合い」をしていた時、黄色のユニフォームの選手はずっと 3 番につけて後方で前 2 人の様子をうかがっていた。「駆け引き」というやつだ。対して KOU 君はいつでも全力だ。学校のマラソン大会でもそう。普段の部活動の練習でも力の限りだ。それでぶっちぎる。このレースで、初めて「駆け引き」を知ったわけだ。

応援団のはちきれんばかりの手拍子を受けながら 2 位でゴール。大したものだ。

しばらくして、KOU 君がテントに戻ってくる。悔しさがオーラとなって体の外に飛び出してきた。負けられない理由（※常なる磐 season II R3, 10.3 発）があったから、KOU 君の気持ちも分かる。にこりともしないが、落ち込んでもないのがいい。きりりと引き締まった感じだ。すでに新しい目標が定まったのかもしれないな。

そして 3 人に共通すること。【練習は本番のように】 本番は練習のように】できたこと。あっぱれ天晴。